

◆ 今週のコメント

- ・ 咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.27(11例)です。平成25年第51週(12月16日～12月22日)の1.71をピークに減少傾向ですが、依然として、過去5年平均値を上回っています。今後も動向にご注意ください。

◆ 今週のトピックス: <インフルエンザ>

インフルエンザの定点当たり報告数は、5週連続で減少して8.88(604例)となり、警報レベルの終息基準値である「10」を下回りました。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 二類: 結核 9例(肺結核 7例, その他結核 なし, 潜在性結核感染者 2例)うち喀痰塗抹陽性 4例
【1月以降の累積報告数 79例(肺結核 40例, その他結核 14例, 潜在性結核感染者 25例)うち喀痰塗抹陽性 19例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	8.88	604
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	5.34	219
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.80	33
	③ 咽頭結膜熱	0.27	11
	③ 水痘	0.27	11
	③ 突発性発しん	0.27	11
眼科	流行性角結膜炎	0.10	1

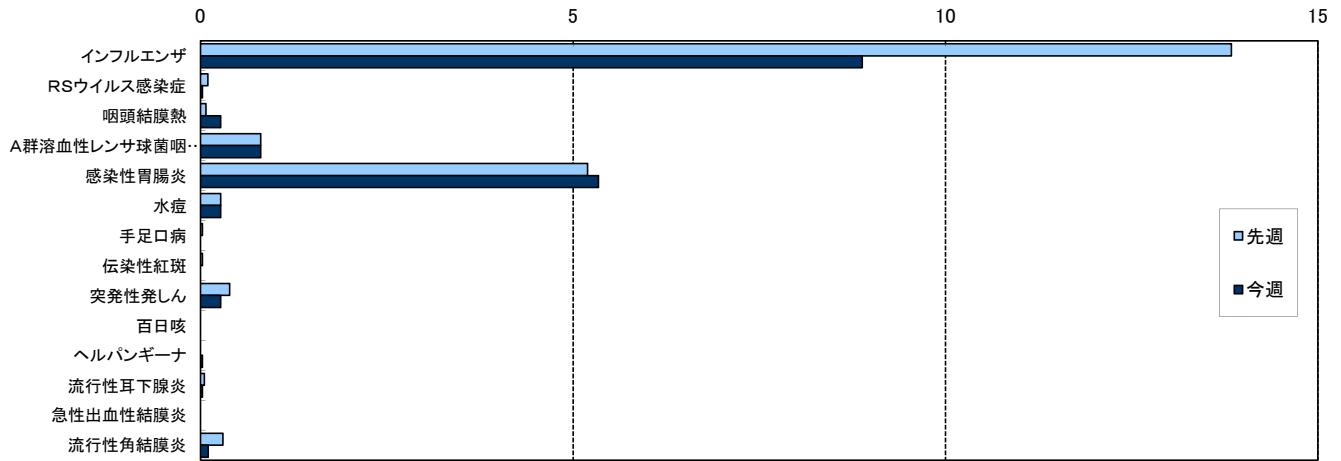
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <インフルエンザ>

(注) 京都市のデータは、平成26年4月3日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

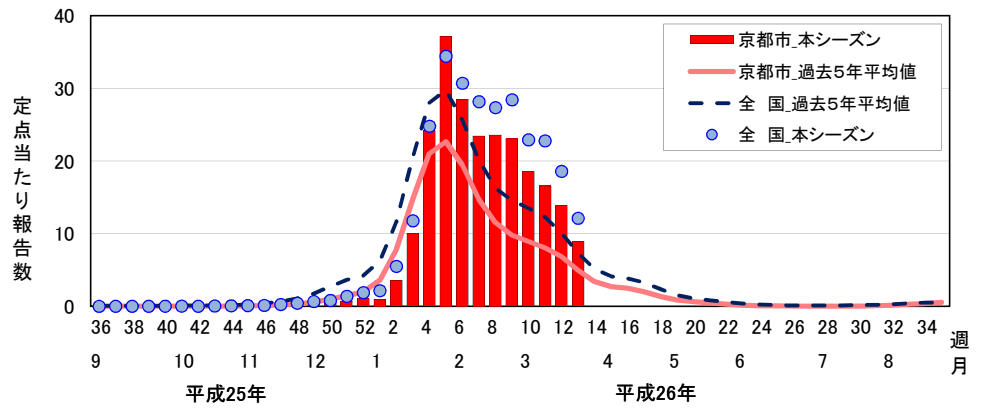
◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第13週)と先週(第12週)の定点当たり報告数の比較



2 インフルエンザの推移

週	報告数(例)
第9週	1,568
第10週	1,259
第11週	1,127
第12週	941
第13週	604
累積報告数 (第36週以降)	16,014

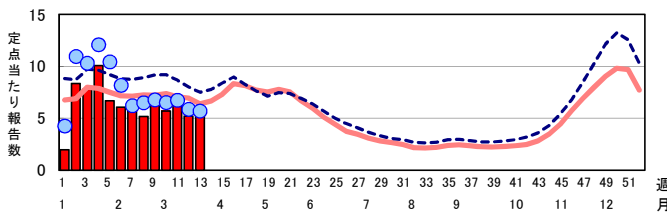


※平成21年/22年シーズンは、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

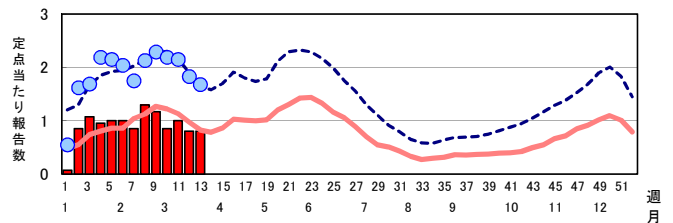
3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

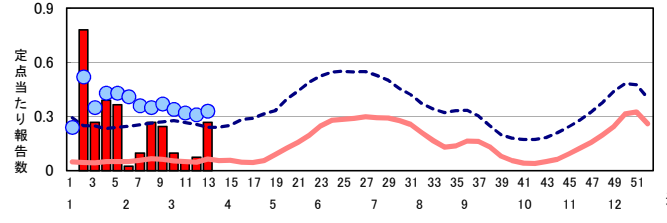
1 感染性胃腸炎



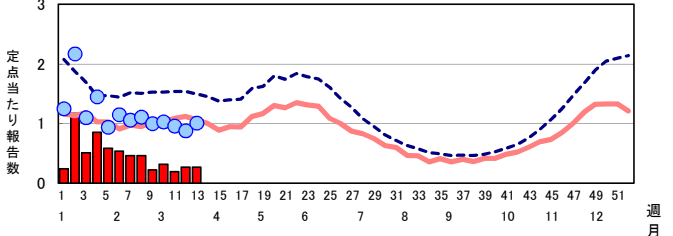
2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎



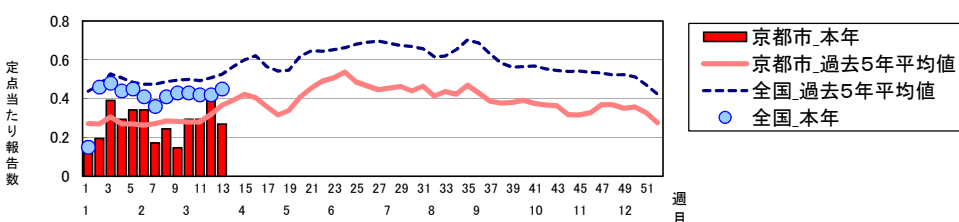
3 咽頭結膜熱



3 水痘



3 突発性発しん



第13週(3月24日～3月30日)トピックス: <インフルエンザ>

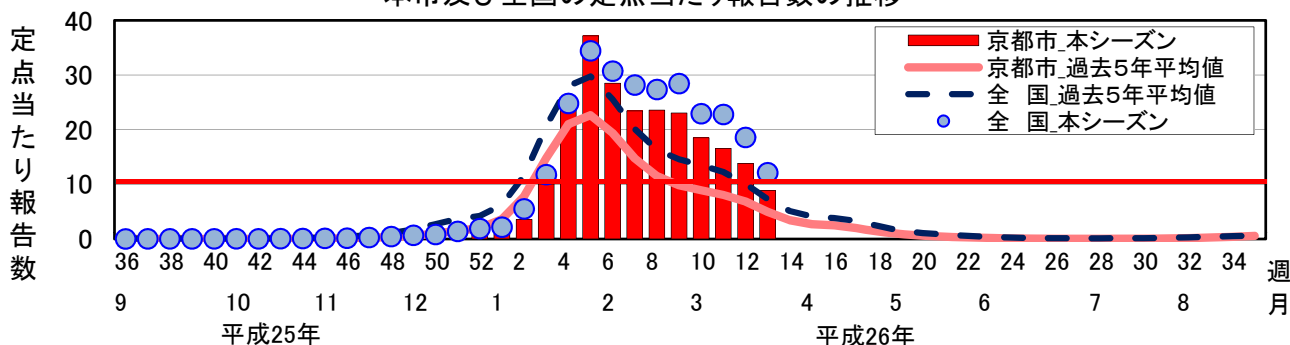
インフルエンザの定点当たり報告数は、5週連続で減少して8.88(604例)となり、警報レベルの終息基準値である「10」を下回りました。ただし、依然として過去5年平均値を上回っています。

行政区別では、全ての行政区で前週よりも減少していますが、東山区及び伏見区で注意報レベルの「10」を上回っています。また、南区を除く10行政区で同時期の過去5年平均値を上回っています。

全国の定点当たり報告数は12.13となり、4週連続で減少していますが、依然として過去5年平均値を上回っています。また、全国の保健所地域で警報レベルを超えているのは253箇所(46都道府県)に減少し、注意報レベルを超えている保健所地域は72箇所(29都道府県)となっています。

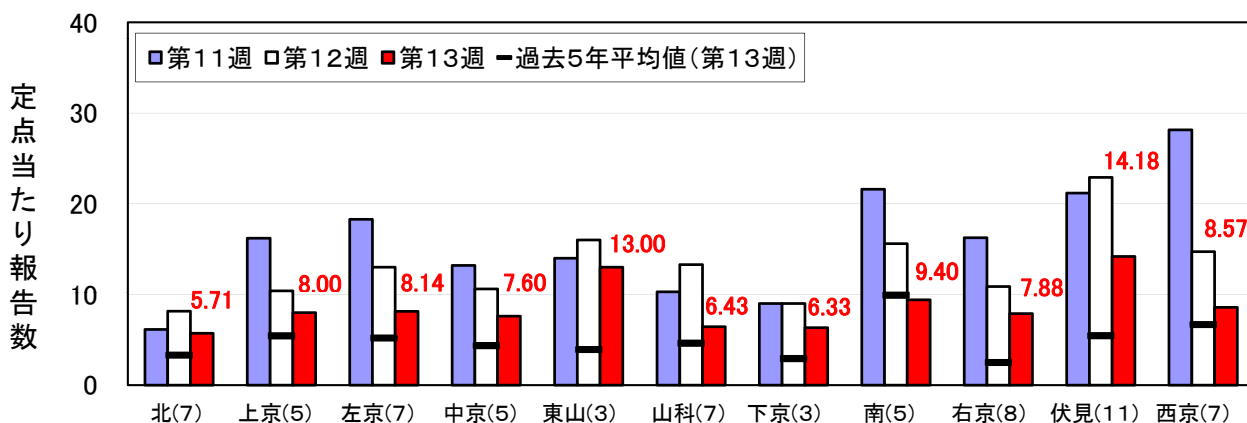
全国のインフルエンザウイルスの検出状況を見ると、AH1pdm09の検出割合が最も多く、次いでB型、AH3型の順となっていますが、直近の5週間(平成26年第9週～第13週)のインフルエンザウイルスの検出割合はB型、AH1pdm09、AH3型の順となっています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



※平成21年/22年シーズンは、例年と流行傾向が大きく異なるため、過去5年平均値の算出には使用していません。

行政区別定点当たり報告数の推移



()内は行政区別のインフルエンザ定点医療機関数

都道府県別定点当たり報告数の推移

